

小笠原の旅 2017



2017年7月

旅のチカラ研究所 植木圭二

第一章 おがさわら丸に飛び乗る

■にぎわいの竹芝栈橋

6月22日朝9時20分、おがさわら丸に乗船するために私たち夫婦は竹芝栈橋に着く。竹芝栈橋は老若男女の多くの客でにぎわっている。

この船は通常は11時出航であるが、今回は八丈島寄港という特別便なので1時間早い10時出航になっている。

乗船時するためにはタラップの手前では海水を浸したマットを踏み、靴の裏をこすらないといけない。植物の種子や外来生物を落とすのが目的なのだが、あえて海水を使うのは小笠原の固有種はカタツムリ類が多いので外来種のカタツムリが入るのを嫌って海水つまり塩水を使う。カタツムリやナメクジは塩で溶けてしまうから。

多くの乗客は海外旅行に行くような大きなスーツケースを持っているのに驚く。それに比べて私たちの荷物は少ない。準備不足は否めない。

“おがまるパック”という往復の船と宿泊をセットにしたお得なチケットがあるが、渡航を決めたのが遅く、既に締め切られていた。従って船も宿も現地の足も各々バラバラに予約したのが出発1週間前というバタバタだった。

■おがさわら丸は快適

乗船したおがさわら丸は3代目で2016年7月に就航した新船で気持ち良い。東京竹芝栈橋から小笠原父島まで約1000kmを24時間で結ぶ。

小笠原には飛行場がないので船でしか行けない。そして定期船は唯一この船だけだ。丸一日かけて小笠原父島に行き、父島に3日間停泊してまた戻って来る。つまり最短でも6日間の行程になる。

船内で一泊することになるので充実した設備はありがたい。2等寝台を利用したが、十分な内

容だ。カーテン付きの2段ベッドに夫婦で上下を使用した。経験値からして1ランク上の感じがする。

面白いものを見つけた。貸し冷蔵庫とでもいえるもので、コインロッカーが冷蔵庫になっている。乗船中借りっぱなしで500円。ビールを買い込んで乗船することをすぐ考えてしまう。

妻が使って快適だったというので船内のシャワーを使ってみる。シャンプーなども常備されていて、温水シャワーで広くてきれい、たしかに快適だ。さすが新造船、お見事。

小笠原諸島には父島に約2000人、母島に約500人が住んでいる。この船は観光客を運ぶ以外に島への物資補給を一手に担うインフラなのだ。

いろんな人が乗っている。目に留まるのは生後数か月の乳児の姿だ。多分内地で里帰り出産して島に戻るのだろう。

既に船内の至るところで宴会が始まっている。

我々、いや私も早速一杯。アルコールをお供に、いよいよ携帯電話もテレビもない航海に出発する。

今回は特別スケジュールで八丈島に寄港する。残念ながら降りられないが、200人位乗ってくる。海水をしみこませたマットをおいてタラップを上がってくる。

八丈島と小笠原とは友好都市になっているので定期的に交流をしているという。

何故か。近くにいた乗客に聞いてみると、かつて八丈島から小笠原に多くの人に移住した歴史があるという。

八丈島は内地から約300kmで、小笠原はさらに約700kmと遠い。気候や風土が全く違うだろうから相当な苦勞をしたに違いない。

第二章 父島をめぐる

■バイクを借りる

6月23日朝11時30分に接岸、昨晚は荒天の中の航海だったが今は晴れている。そしてやはり暑く感じる。ただ28°Cくらいなので内地の真夏の暑さではない。やはり太平洋の真ただ中なので海の温度以上には上がらない。

まずはレンタバイクを予約しているので店を訪れる。店の人の話では昨日から天気になっており、この島には梅雨がないので梅雨明けとは言わないまでも、このまま夏になるという。

バイクは父島滞在の3日間借りる。バイクといっても125CCのスクーターで妻と二人乗りをする。バイクの運転は久しぶりで最初はぎこちない。後ろに乗る妻も怖がっている。

そんなことはお構いなく、車もほとんど通らないのでレッツゴーだ。



父島の道は広い。ハワイの田舎に居るような感じで、アメリカ合衆国のサイズで道路や区画ができています。広い道路、そして教会、異国情緒が漂うが、落ちつきもあって美しい街並みだ。この光景もこの島の歴史と関係しているようだ。

およそ 40 年ぶりにバイクに乗る“にわかライダー”にとっては広い道はとても走り易い。

妻とのバイクの二人乗りは初めてのことになる。この旅の出発前にバイクを借りて二人乗りで島を回することを息子に話したら、ヒューヒューと言われ冷やかされた。この年になって息子に冷やかされるとは思わなかった。

■半日観光へ

まずはメインストリートにある生協に行く。スーパーと呼ばれるような食料品店はこの生協以外にもう一店あるが、どちらの店も品物が少ない。特に生鮮食料品は皆無だ。

弁当を買い込み、バイクに乗って街はずれにある小高い山の上にある展望台に行く。すぐ隣に気象庁の施設があるところなのでウェザーステーションという名前が付いている。大きなウッドデッキのようなものがあり、ここで眺望ランチとしゃれこむ。

彼方に母島を臨み、手前に南島を見る。そして太平洋がきれいに見える。まさに地球のまるさを感じる。海は青く、空も青く大きい。「これはすごい！」と思わず声が出る。

観光客を 10 人くらい伴った観光ツアーがガイドに案内されて次から次へとやって来る。そして観光客は一様に同じことを言う。そう「これはすごい！」だ。

ここを案内するときのガイドは楽だ。こんな絶景は説明をする必要がないから。



バイクの機動性を活かして父島北部の宮之浜、そして釣浜にも立ち寄る。ただし釣浜には残念ながら出られない。不発弾が発見されてということで立ち入り禁止になっている。それも最近禁止されたようだ。この島であった戦争という歴史を改めて感じてしまう。

釣浜の隣の長崎展望台は見事だ。断崖絶壁の海岸線に入り江があって、海の色が違う。沖は藍色、そして陸地近くはエメラルドグリーンだ。しかし、だんだん海の綺麗さに慣れていることに気が付く。

ウミガメの保護と飼育をしている海洋センターにも立ち寄る。世界各地からやってきたボランティアによって組織されているが、彼らの地道な活動がこの島のウミガメを守っている。

水産センターにも立ち寄る。ここは東京都の施設なので無料で水族館が楽しめる。大きなサメの歯が飾ってあった。全ての歯にスピアが並んでいる。生きるためには歯が最も重要という証なのだろう。

大神山神社という神社が小高い丘の上にある。バイクを置いて何十段かの階段を登る。途中で面白いものがある。ギリシャやローマで見る円形の競技場のようにになっている石のベンチに囲まれて相撲の土俵がある。そしてそれは遺跡ではなく現在も使用されている現役だ。

群馬の草津温泉で土俵を見かけたことがあるが、観光地では滅多に見ない。いや観光地だけではなく、もはや街中ではまずお目にかからない。

それがこんな南の島にあるなんて、小笠原の生活や文化は何と面白いのだろうか。



■店と宿

夕方になって涼しくなったせいなのか、街は活気づいている。いやそれだけではないような気がする。

生協にまた立ち寄る。先ほどとは打って変わって品物が所狭しに並び、そして買い物客もごった返している。おがさわら丸が運んできた品物、それも生鮮食料品によって店の雰囲気が一変する。その差がすごく分かり易い。おがさわら丸はやはり島のインフラなのだ。

野菜などの生鮮食料品は群馬のトマト、秋田のキャベツと首都圏ではよく見かけるものが多い。関東地方を中心に日本全国からいろんなものが集まってきたものを船に積んでくるからだ。ここはやはり東京のスーパーなのだ。

メインストリートに戻って来て雑貨屋に入る。“ギョサン”と呼ばれているビニールサンダルを購入する。鼻緒が付いている便所のスリッパとでもいうもので船の中でも売っていた。この島ではみんな履いている。漁業用サンダルの略で、漁師が使っているらしい。だから丈夫で作業性が良い。

ろくな準備もせずに来てしまったので履物は靴だけだったが、これで足元だけは島民のようになる。

宿泊は同じ宿で3連泊することになっている。ワンルームでツインベッド、冷蔵庫や流し台もあるので自炊も可能な部屋だ。食事は初日だけ夕食付きにして、あとはB&B (Bed & Breakfast)にした。B&Bなどというとニューヨークのようだが、宿から少し離れたアパートのような別棟の一室に泊まる。しかしここはあえてアメリカナイズしてB&Bと呼んでおこう。

夕食は豪華でもないがサワラの差し身が出てくる。サワラは絶品だ。やわらかいマグロのトロ

みたいだが舌触りはマグロよりももっと良い。

■父島のビーチを回る

出発して3日目、上陸2日目の今日はバイクでゆっくり父島一周をすることにする。一周といっても海岸線のほとんどは断崖なので実際は1/3周くらいしかない。そして半分は海、半分は山を走ることになる。

堺浦海岸は静かなビーチだ。小笠原は人が少ないので何処も同じようで、まるで時間が止まったようだ。時間が止まったと言えば、ここには太平洋戦争で魚雷攻撃を受けて座礁した濱江丸の残骸がある。今では魚の良い住処になっているのだろうが、既に戦争から70年以上経過している。

となりの扇裏海岸にも立ち寄る。言うまでもなくきれいな砂浜のこのビーチでは数人の観光客が遊んでいる。カヤックに乗る人、シュノーケリングを楽しむ人と様々だが、何とドローンを持ってきている外国人がいる。ドローンにはカメラが付いていて上空からビーチや島の光景を見ている。

さすが世界自然遺産の島だ。大自然のビーチに対してハイテクが混在している。そして国際的だ。

私は後悔している。もう少し準備をして来ればよかったと。シュノーケリングの道具を持って来れば良かったかもしれない。せめて海水パンツは必須だった。



小笠原神社に立ち寄る。この神社は小笠原諸島を見つけたと言われている小笠原定頼を祀っている。そういえば小笠原に来てから神社はいくつか見たが、寺は見たことがない。仏教が伝来していないのだろうか。葬式はどうするのだろうか。この島の不思議なところをまた一つ見つけたような気がする。

この神社で大変なことが起こってしまう。水筒のキャップの閉め方が甘かったのでバッグの中が浸水し始めた。慌ててバッグの中のものを出そうとして、誤ってスマホを落としてしまった。こともあろうか、その上を足で踏みつけたので画面が破損。完全にヒビが何十本も入ってしまった。それでも動作はするが、もはや液晶は交換だろう。

とほほ。

神社は何も守ってくれなかった。

ココペ海岸という、またまたきれいなビーチに出る。近くに人家はなく、隠れ家的なビーチだが、昼時ということもあって他に数人の観光客や地元の人に来ていてシュノーケリング・海水浴&昼食を楽しんでいる。家族連れ、そして子供が多いことに気が付く。

私たちが生協で買ったおにぎりを食べて昼食にする。おにぎりには具がたくさん入っている。内地のコンビニでは考えられないような量のタラコがこれでもかとう入っている。

ここだけでなく、どのビーチも東屋（あずまや）にベンチ、テーブルがあり、きれいなトイレもあって設備が充実している。まだ新しいのでほとんどは世界遺産登録時に整備されたようだ。



ビーチには様々な生き物がいる。砂浜近くではヤドカリを多く見ることができる。

さらに人里離れた小港海岸に出る。ここは広い砂浜でウミガメの歩いた跡が残っている。昨夜にウミガメが産卵のために上陸して卵を産んだらしい。そんな足跡がたくさんある。ここ小笠原はウミガメの産卵が有名だが、手付かずの自然ということを実感する。



子供を連れた家族連れが海水浴をしている。3才くらいの子供と小さい乳児がいたので月齢を聞いてみると、何と3ヶ月という。首も座っていないホントに赤ちゃんだ。母親も若く、ビキニの水着が似合っている。おっとビキニは関係ないか。

彼女は埼玉県出身で旦那は小笠原の人という。こちらに嫁いだ後に子供2人を里帰り出産したという。おがさわら丸でもそんな母子たちを多く見たが、この島にはその魅力があるのだろう。

コペペ海岸から山道を歩いて20分という中山峠に登る。ここからの眺めはまた最高だ。断崖絶壁と白い砂浜、藍色とエメラルドグリーンの海、そのエメラルドグリーンの海に浮かぶクルーザーの影が下の海底に映っている。炎天下の山道を20分登った甲斐があった。



■山岳部分を回る

父島の最高峰の中央山に登る。登るといっても上り口まではバイクで乗り付け、10分程歩くだけだ。ここは標高 319m で景色が良い。北にある兄島、南にある南島、そして 50km 彼方にある母島も見える。



ここにも旧日本軍の軍事施設の跡がある。高射砲の台座のようなものが残っているが、電波通信儀の台座という。太平洋戦争で大規模な軍事拠点だったのは硫黄島で、小笠原は通信の拠点だったらしい。だから硫黄島ほどのすさまじい戦闘が展開されることはなかった。それは何よりも硫黄島には飛行場があったからだ。

この山の周辺から夜明山にかけて防空壕や砲台跡が多い。

山を下りていく途中で野生の山羊に会う。1頭ではなく、立て続けに4~5頭に会う。小豆島や屋久島と違って、この島には鹿や猿はいない。唯一の動物は山羊という。

小笠原諸島は一度も大陸と地続きになったことがない島で、このような島を海洋島という。だから動植物が独自の進化をしていく。しかし山羊は人間が持ち込んだに違いない。山羊が太平洋を泳いでは来られない。

帰路で国立天文台の施設で直径 20m もある電波望遠鏡 VERA を見つける。そのパラボラアンテナのようなものがモーターで回っている。門が開いていて敷地に入れたので見学させてもらう。

説明板では、同様な施設が鹿児島、石垣島、岩手にあり、この小笠原のものと合わせて4つの電波望遠鏡が連携して銀河系の全てが観測できると書いてある。

このようにこの島の地理的特性からいろいろな国家機関の施設が集まっている。国立天文台以外に海上保安庁、気象庁観測所、海上自衛隊、宇宙航空研究開発機構 (JAXA)、国土地理院などある。



咸臨丸の墓地という石碑がある。幕末にアメリカ合衆国に渡ったあの有名な咸臨丸だ。幕末に探検、測量のために父島にやって来たという。その時に亡くなった乗組員の墓という。

この島には日本の近代史がタイムカプセルのように残っている。

■バイクは楽しい

1 日半で、父島の車が走れるほとんどを回ることができた。やはりバイクは違う。普段歩き旅が多い私にとっては機動力が 10 倍くらいに拡大した感がある。

昔、バイクの免許を取った頃は、女の子を乗せてバイクの旅をするというささやかな夢があったが、そんな夢が 40 年経って実現するとは思わなかった。

できれば 40 年前の妻だったら良かったかもしれない。それはこちらも一緒か。

第三章 返還祭

■父島返還際は楽しい

6 月 24 日夕刻、村役場の前のお祭り広場で父島返還祭が開催されている。父島がアメリカ合衆国から返還されたのは 49 年前の 6 月 26 日という。

この広場には常設のステージがあり、芝生が敷き詰められている。屋台が出店している。島内にはテキヤがいる訳ではないので、食堂や飲み屋、JA や自衛隊などが出店している。

ざっと数えて 500 人くらいの島民や観光客が集まってきている。そしてここでも若者や子供が

多いことに驚く。挨拶に立った八丈島から来た訪問団団長もいう。若い母親やこどもがとにかく目につくという。ついでに若い美人の母親が多いというリップサービスもある。いやリップサービスではなく本心かも知れない。八丈島とは人口構成や住民の特性などが全く違う。

村長の話では小笠原村の人口は増えているというからすごい。平均年齢は 40 才ということで八丈島よりも 10 才以上若く、東京都の自治体では最も若い。

それは若い人たちが島の魅力にひかれて移住して、結婚して子供ができて今の状況になっているようだ。子供や若者で活気づいている。

その子供たちが合奏や、タヒチアンダンスやフラダンスも踊ってくれる。子供だけではなく、若者から中高年まで島のいろんな人が参加して伝統の島踊りや太鼓なども披露してくれる。そしてみんな上手い、相当練習をしているという感じがする。

ステージに上がる人だけではなく、芝生に座って観る人たちもビデオ撮影、応援と活気がある。

こういう雰囲気の際は最近あまり味わっていない。遠い昔、私が小学生の頃の町内会のお祭りを思い出すが、少なくともそれよりも活気があって、裕福だ。



■屋台も大繁盛

屋台も大変な賑わいになっている。生ビールには長蛇の列ができて途切れない。待っていてもなかなか行列が減らないので「島のラム酒」ソーダの割を買って飲む。まあ、これは普通の味だ。

ウミガメの肉の煮込みを売っている。ウミガメは昔からの島の食文化で、現在でも食べている。数量制限があるというが季節になるとスーパーで買えるという。

島内でも集落によって味付けが違うようで、母島はみそ味で父島の北部は塩味という。従ってここでは塩味で煮込んである。コラーゲンたっぷりで酒のつまみにもなる。

妻も少し食べたが、私が残りのほとんどを食べた。ウミガメの姿を想像したのかもしれない。

海軍カレーの旗が立っているのは海上自衛隊の屋台である。村のメインストリートの突き当りに海上自衛隊の基地があるので隊員が海軍カレーを出している。自衛隊員が作った本物の海軍カレーなので、当然買って食べる。

これは旨い。具には家庭のカレーのようなニンジンやジャガイモも入っているが、味に深みがある。旧日本海軍から伝統の味だ。そしてさすがに自衛隊と思うのはライスの量が多い。全て大盛カレーだ。

そういえばこのカレーだけでなく、島のおにぎりや弁当などご飯や具の量がとても多い。

カレーは早々に売り切れてしまった。集まった人の数に比べて屋台の店舗数が少ないのが原因だが、多分こんなに人が集まることを想定していないと思われる。

来年 2018 年は返還 50 周年という節目なので、更に盛大に行われるようだ。

■小笠原の歴史は面白い

この島の歴史は日本の近代史に深い関りがあるから、とても面白い。

1593 年に信濃の国の小笠原貞頼が発見したと伝えられている。ちょうど豊臣秀吉の朝鮮出兵の時期にあたる。つまり日本が最初に世界に出ようとしていた頃だ。

その後の江戸幕府は興味がなかったようで、鎖国政策もあって内にこもってしまう。だから最初の定住者は日本人ではなく捕鯨船に水や食料を供給するために住み着いた欧米人やハワイ人だったという。

歴史にタラレバはないが、もしもそのまま放っておいたらニュージーランドのように白人の支配する島になっていた。

その後 1861 年に小笠原を調査するために幕府が咸臨丸を派遣した。その時期はペリーが浦賀に来港し、日本が開国した 2 年後だ。日本が再び海外に目を向け始めた時にあたる。

その結果、明治維新後の 1876 年に日本の明治政府が領有宣言をした。アメリカ合衆国とイギリスと交渉の末に欧米系島民の既得権益を認める代わりに領有権を認められた。

その後は八丈島から移住が行われて、クジラやカツオなどの漁の拠点として栄えることになる。島民はその移民以外に欧米人もいて、最盛期には 7000 人を越えたという。

そして次の海外進出は太平洋戦争だ。ただ、開戦する前ではなく戦況悪化により本土防衛のために島を要塞化するので強制疎開ということで島民が追い出される。この時の島民は 6886 人で、そのうち 825 人は兵士として残留させられる。

太平洋戦争での敗戦によりアメリカ合衆国に統治され、最初は欧米系元島民 129 人の帰還が許される。戦前の街の区画などを廃止して、新しく欧米風の街づくりをした。結果、広い道路や区画が現在の姿になることができた。

そして戦後 23 年経った 1968 年 6 月 26 日に返還され日本の主権が回復する。尚、沖縄返還はさらにその 4 年後になる。

村政が確立されたのが 1979 年ということで、ごく最近の話だ。そして 2011 年に世界自然遺産登録された。

現在の人口は父島約 2000 人、母島約 500 人で、戦前の 1/3 になっている。

旧島民よりも最近移住してきた新島民が多くなっているという。

第四章 母島に渡る

■ ははじま丸

上陸して 3 日目、父島から母島に渡るために 7 時 30 分、乗船前に頼んであった弁当を受け取りははじま丸に乗り込む。母島には食堂もあるが、あまりあてにしない方が良いと聞いている。

靴底の種子や外来生物を落とす作業は、竹芝栈橋でおがさわら丸に乗る込む時よりも更に念入りになる。

ははじま丸は、おがさわら丸と同時期に就航した新造船だ。おがさわら丸が 11000 トンなのに対して 499 トンということで小さいが、あの威臨丸が約 300 トンということからすれば充分な大きさかもしれない。

母島まで約 50km、2 時間の船旅になる。そして今日は日帰りで往復する。

船に乗ってデッキにいと、小笠原について非常に詳しい人に出会う。年に何回も何十年も小笠原に来ているという。この中高年のおじさんは島民以上に詳しい、小笠原の達人だ。

昨日の返還際のこと聞いてみると、年々盛んになっているという。自衛隊の人たちもボランティアでよく島内行事にも参加するという。

神社の近くにあった相撲の土俵については、父島、母島、硫黄島の対抗で住民や自衛隊隊員などを集めて相撲大会を開いているという。現在は硫黄島には民間人はいないが元島民、その子供や孫、そして自衛隊も駐在しているので 3 島対抗戦は成り立つ。そうすると大体は自衛隊員が強く、対抗戦に貢献するという。その貢献に対して自衛隊の幹部からご褒美が出るとかという。

人々は対抗戦に燃える。島民あるいは仕事で赴任している人たちが一致団結する姿が目につく。

船のデッキではもう一つ面白いものが見ることができる。

海鳥とトビウオとの闘いだ。船のエンジン音と振動によって驚いてトビウオが海面から飛び上がって来る。そこを海鳥が待ち構えていて捕獲する。待ち構えているというより、船に平行に飛びながら海面をうかがっているという光景だ。

私が驚いたのは、海鳥は海面の上だけではなく、急降下して海面下に突っ込むことがしばしば

ある。つまり潜ってトビウオを取っている。

見事な漁を見せてくれる。2時間の旅は退屈することがない。



■母島巡りに出発

9時30分に到着して、帰りの便は14時なのでほとんど時間がない。レンタカーも予約できなかったのも、母島ではガイド付きの半日の島内観光ツアーに参加する。

ガイドは福岡生まれで、正義感が強そうなさわやかなアラサー男だ。運転手をかねているので運転しながら様々なことを話してくれる。

ツアー客は全員で9人、年配の男女で4つくらいのグループに分かれている。

母島は東京都で、民間人が暮らす最南端の島なので道路は都道か村道になるが、幹線道路は都道で、島の南端近くに都道最南端の標識がある。

展望台や絶景ポイントはあまりない。いやあるのかも知れないが、車で行けるように整備されていないというのが正しいのかも知れない。何しろ父島より小さいのに母島の方が険しい。

乳房山という462mの山がある。母島だから乳房山か。ただ残念ながら乳房は1つで、2つない。

そういえば島の名前も面白い。小笠原諸島は3つの列島からなっていて、母島列島は母島を筆頭に姉島、妹島、姪島などある。いずれも女系だ。

一番大きい中心になる父島列島は男系で、父島、兄島、弟島、そしてなぜか孫島もある。この孫は男の子なのであろう。

父島の北方70kmくらいに聳島（むこじま）列島があり、聳島の他には嫁島、媒島（なこうどじま）がある。それにしても普段はあまり使わない漢字だ。

そしてこの名前について面白いことに気が付く。それは聳も嫁も媒も、どれも血がつながって

いない。

昔の家族の序列のようなものが何となく読み取れる。まずは男たちが中心、そして女たちが続く、血のつながらないムコやヨメは最後だ。何も考えないで付けた名前ではなさそうだ。

これらの島で現在人間が住んでいるのは父島、母島だけだ。

■自然保護

アラサーの熱血ガイドは植物、動物、鳥などを詳しく説明してくれる。彼は小笠原が好きで移住してきたのだろう。自然の保護についても熱く語ってくる。何が外来種で、どう対策しているとか本当に詳しい。

小笠原には固有種の昆虫が多くいるが、外来種のグリーンアノールという緑色のトカゲがこれらを食べてしまうので、固有種が激減している。よってこの駆除をしているという。

そのために相当広い範囲に柵を設けて、まず入れない・逃げられないようにしている。柵には滑りやすいテフロンを使い電流を流している。その上でこの柵の中にゴキブリホイホイとでもいうような捕獲用のアノールホイホイ？を仕掛けている。

この仕掛けや規模を見ていると関係者の本気度を感じる。



母島は自然が多い。自然保護そして自然観察の島でもある。山や海という自然と触れ合うなら父島よりも母島だろう。

アラサーガイドの話では、母島は農業が進んでいて農産物も多く作っているという。

今回は時間も無く装備をもって来ていないので、母島にもちょっと寄ってみようというノリで来たが、やはり旅の目的をハッキリさせないといけない。

何事も目的と準備が重要だと痛感する。それは旅だけではないか。

■カカオ農園

大変興味深い看板を妻が見つける。



看板には以下のように書かれている。平塚製菓株式会社 小笠原カカオ農園。折田農園。

チョコレートの原料のカカオは、赤道を中心とした緯度 20 度以下の高温多湿地帯でのみ栽培されるという。それはフィリピンよりも南で当然日本では不可能とされている。

ところが 2016 年に平塚製菓という埼玉県草加市の会社が国産のカカオでチョコレートを作ることに成功したというニュースが流れた。カカオの栽培場所は、ここ母島である。そして偶然とは言え、その農園が目の前にあることに感動する。

これから事業化を進め、2020年の東京オリンピックで土産物として Made in Tokyo のチョコレートを販売するという計画があるという。ここは母なる島、また一つ、島の自慢が増える。

■戦争の爪跡

あちこちに戦争の爪跡が残っている。父島に比較して戦後の開発が進んでいないからだろう。ゴムやサイパンでなく、沖縄は別として東京都で戦争の跡が残っていることは貴重だ。



およそ 75 年前に日本がアメリカ合衆国と戦争をしたことを知らないという若者も最近は多いという。これら戦争の跡も手付かずに残しておいてほしい。

撤去しようとしても費用が掛かるので、きっとこのまま朽ち果てるまで置いておかれるのだろう。

■かつての繁栄

島の北に位置する北港は、かつて栄えた漁港で現在は栈橋の跡だけが残っている。港のすぐ近くには集落や小学校もあったが、今は何もない。小学校は門柱だけが残っている。ガジュマルが生い茂るジャングルがとても校庭だったとは思えない。



ガイドの話ではガジュマルも外来種で、当初生息できないと思われていたという。理由は花が実の中に咲く雌雄同株で、受粉には特別な昆虫が必要だからだ。ガジュマルはイチジク属の植物なのでイチジクと共生しているイチジクコバチという虫が小笠原に来たか、別の虫がその役割を担ったかになる。とにかく自然界の力は凄い。

そんな話を熱血アラサーの彼はずっと話してくれる。

■不安は的中

ツアーが終わって船着き場のある観光協会の前に戻ってきたが、同じ車に乗ったツアー客の何人かが騒いでいる。どうも頼んでおいた弁当がまだ届いていないらしい。

観光協会の人でも電話して手を尽くすが、どうも注文を受けた方が忘れていたようだ。おにぎりならばできるが、それでいいか。などの声が聞こえてくる。船が出る直前に何とかおにぎりだけ届いた。

これも南の島の愛嬌かもしれない。

第五章 空のエンターテイメント

■サンセット

父島帰島後に比較的雲が少ないので、ウェザーステーションに夕陽を見に行くことにした。まだ日の入りには時間があるのでウッドデッキは数人の観客だ。



ところが日の入り時間が近づくにつれて人数が増えていき、最後は 150 人位になってきた。ここはサンセットの人気スポットだ。

実はここ小笠原で、グリーンフラッシュが見られるという。グリーンフラッシュというのは天気の良い空気の澄んだ日に夕陽が沈む直前のほんの一瞬に、オレンジ色がグリーンになる極めて稀な現象だ。地球一周の船旅でも一度も見るができなかったことを思い出す。(地球一周の船旅の旅行記でも記載)

そして今回も残念ながら見ることはなかった。

■満天の星

サンセットの後は、星空だ。

宿から出て街路灯の比較的影響しないところに行くだけで、満天の星を見ることができる。

昨日も今日も本当に多くの星が見え、かなりの星座は確認できる。北斗七星から北極星を割り出すと、北極星はかなり低い位置にある。北極星の高さがその場所の緯度を示すので、27度くらいのはずだ。

そして北極星のほぼ反対側の水平線近くには、うまくいけば南十字星が見えるかもしれない。

小笠原で南十字星を見たというインターネットの書き込みも多い。ただ、見たことがない人は

なかなかどれが南十字星か分からない。私は地球一周の船旅でかなり見ていたのでちょっと自信がある。

南十字星を見つけるためのポインターと呼ばれる星 2 つを探すのだが、そのポインターは見つけることができた。問題は南十字星の十字の本体 4 つの星は、2 つしか見えない。残り 2 つは雲に隠れているか、暗いので分からないのかも知れない。(地球一周の船旅の旅行記参照)

残念と思いつつもこんなに多くの星を見ることができたのはありがたい。

第六章 お勧めの南島へ

■南島ツアーのクルーザーに乗る

6月26日の午後には父島を離れるのだが、どうしても南島に行きたくなり、南島に行く半日ツアーに乗ることにした。

昨日ははじま丸で出会った達人に小笠原のお勧めを聞いたら、迷わずに南島という答えが返ってきたからだ。世界自然遺産に登録される前から南島の自然は注目されていたという。とにかく良いところだから絶対に行った方が良いと言っていた。

南島は認定されたガイドが同行しないと行けないので何らかのツアーに乗らないといけな

クルーザーで南島に行くのだが、母島に行くとき以上に更に靴底の清掃が厳しい。靴の裏の泥がきれいに落ちているかをガイドが全てチェックする。ここまでやるかというのが正直な感想であるが、ガイドは真剣だ。何度も NG と言われて、最後は細いヘラのような道具を使って泥をかき出す。ようやく OK が出る。みんな真剣に自然を守ろうという意志が伝わってくる。

クルーザーは乗客 29 人乗り込んで 8 時 30 分に出航する。乗客以外には若い女性ガイドが 2 名、そして船長が 1 名だ。その他に上陸用に小さなモーターボートも一緒にくる。

■ダイビング

まずは父島と兄島間のダイビングスポットに立ち寄る。ここは潮の流れがぶつかるポイントなので魚が多い。

透明度も高く、驚くほどきれいなので、船の上からでも多くの魚を見ることができる。この海のきれいさと魚にはみんな驚いている。水族館では味わえない海と魚がここにある。正確に言えば初めて来た人は本当に驚き感激しているが、何回か来ている人は魚を寄せるエサを投げ入れている。だから余計に魚が集まってくる。

ほとんどの人は水着になってシュノーケリングを楽しみ始める。ガイドの女性含め女の子はみんなビキニ姿だ。こちらも魚以上にまぶしい。



昔、学生時代に沖縄の西表島に行ってシュノーケリングをしたことを思い出した。その後数年はシュノーケリングをしていたので、それなりに経験がある。せめて海水パンツを持って来ればとまたしても後悔している。

そんな中にシュノーケリング初心者もいる。30代くらいの兄ちゃんだ。よほど私が教えてあげようと思ったが女性ガイドにまかせることにする。女性に教えてもらった方がいいだろうと気を利かせたつもりだったが、極めて簡単なアドバイスの後に海に落とされている。やはり世の中は甘くなかった。

おじいさん3人組はフィン（足ヒレ）無しで泳いでいる。ガイドもその勇気、いや無謀さに驚いている。海流の流れが激しい場所ではフィンは必須だからだ。この3人組はフィン以外の装備はしっかりしているので、もともとは素潜りを得意とする仲間なのかも知れない。

泳がない人のために箱メガネが用意されており、妻はその箱メガネで感激している。こんなにきれいで透明度高く、熱帯魚のようなカラフルな魚が多い海は初めてかもしれない。

■南島上陸

いよいよ南島に上陸だが、細かな規定がある。上陸時間は2時間まで、認定ガイド1名につき最大15名と決まっている。そして歩く道も決まっていて、縦一列で歩き、ほぼ前の人と同じところを歩かないといけないようになっている。とにかく自然保護最優先を忠実に守っている。

クルーザーは大きいので同行してきた小型モーターボートに移って上陸するのだが、鮫池からしか上陸できない。鮫池といっても本当の池ではなく入り江なのだが、外海から鮫池に入るには

狭い場所を通過しないといけないので池のようになっている。これはボートの操舵が難しそうだ。

鮫池は鮫が昼寝をするのでそう呼ばれており、そういえば鮫のような影も見える。それにしてもきれいな海（入り江）である。雑誌のグラビア写真などに出てきそうな光景だ。

栈橋がないので、岩場に船の先端をつけて上陸する。この操舵もなかなかのもので感心する。上陸してすぐそこには新しい手すりがある。ガイド曰く、この南島で唯一の人工物という。この手すりを造るのも賛否あったという。確かに年寄りや杖をついた人たちにとっては手すりがあるとありがたいが、自然破壊はこうして始まっていくのかもしれない。



■ここは絶景と自然の宝庫

上陸して一列縦隊で高さ 30m くらいの山に登る。

途中で鳥の巣が確認される。先頭を歩くガイドが次の人に教えて、そしてまた次の人に引き継がれる。巣には鳥が卵を温めているが、刺激しないようにということで、カメラもノーフラッシュだ。そしてみんな小声で話をする。

ガイドからは後ろを見ないで登れというアドバイスがある。危ないからという意味ではなく、登った後の絶景を一気に見せたいためだ。

登ること 5 分で、山頂に到着する。ここからの眺めは本当に絶景だ。

左を向くと南島の全景が見えて、反対側の右側は深い紺色の海を挟んで父島の南側の断崖が見える。父島の南側には道路がないのでバイクや車では行けない。駐車場から 3 時間くらい歩か、カヤックを使うしかない。歩く場合は認定ガイドの同行が必須になる。

そこにはハートロックと呼ばれるハート型の大きな岩や、純白の砂のジョンビーチがある。英語の名前が多いのは小笠原の歴史からだろう。



そして南島の内部に目を向けると、低い草木の向こうに純白の砂浜、その向こうは鮮やかなエメラルドグリーンの扇池がある。この池もアーチ型の岩のトンネルで外海とつながっているの池ではなく入り江だ。外海は、また深い紺色をしている。

本当に絶景だ。ここからの景色は小笠原の紹介ポスターなどに良く使われる。

右と左の景色が全く異なる。この対比が素晴らしい。

昨日の小笠原の達人のアドバイスを聞いて本当に良かった。感謝だ。



扇池に向かう途中は純白の砂浜だ。ただこの砂浜は熱くないというので、みんな裸足になって歩く。炎天下の砂浜なのに確かに熱くない。珊瑚のかけらでできているという。



この砂浜にはウミガメがたくさん産卵にくる。海岸から産卵場所までウミガメが歩いた後が鮮明に残っている。そして海洋センターのボランティアが保護のために産卵したところに目印をつけている。目印は人為的だということが分かるように砂に3本の小枝を立ててある。

砂浜には約1400年前に絶滅した貝がたくさんある。ガイドの説明ではヒロベソカタマイマイというカタツムリのようなもので直径3~4cmほどある。そんな古くないで半化石という。

扇池は純白な砂浜と浅瀬の岩場があって、その先は深くなっている。直径30mくらいだ。



ここでまたみんなは水浴びをする。炎天下を歩いたので気持ちよさそうだ。私たちが膝まで海に浸かる。膝まででも気持ち良い。

岩場と砂浜の間には 20cm くらいのカニを 2 匹見つける。色鮮やかな魚も見ることができる。人間は我々 10 人程しかいない。本当にここは別世界だ。



再び砂浜を歩き、鯨池に戻る。小型モーターボートが迎えに来てくれている。

ガイドが気をきかせて鯨池の岩壁にあるカツオドリの巣を見せてくれる。巣の中は見えないが、巣を守るカツオドリの雄姿は近くで見ることができた。



■帰還

狭い鮫池の出口を抜けて、波が荒い外海の岩場の際を揺れながら水しぶきをかぶりながら沖合で待つクルーザーと合流する。そして帰還の途につく。南島から父島の港まで約 20 分だ。

帰りは船長の傍に立っているいろいろな話を聞くことができた。

私が、この海は日本いや世界でも 1、2 の素晴らし海だと持ち上げる。するとまんざらでもなさそうに小笠原の素晴らしさを語ってくれる。イルカと一緒に泳ぐドルフィンスイム、ホエールウォッチング、スキューバダイビング、そしてクルーザーフィッシングなど話は尽きない。

それらの言葉の根幹には、この島の自然を島民やガイドがどれほど大切に保護しているかという自負を感じる。

コックピットの計器は同じものが 2 つ並んでいる。理由はエンジンやスクリューが左右同じものを 2 基あるからだという。

軽油で運航しているというので燃費を聞くと、1 リッターで 300m くらいという。私が知っている戦車の燃費より悪い。戦車は 1 リッターで 400m 走る。そのことを船長に伝えると、戦車より悪いのか。とため息をついていた。

第七章 帰りの船にて

■盛大な見送り

6 月 26 日、おがさわら丸の父島からの出航の見送りは盛大だ。栈橋には島民のおよそ 1 割にあたる 200 人くらい集まっている。

環境を考慮して紙テープはない。その代わりに太鼓の連打、「また来いよ!」「待っているよ!」という大きな声、そして笑顔がたくさんある。

汽笛とともに離岸して船が沖に出るまで 20 隻くらいのモーターボート、クルーザーが併走してくる。

そしてお決まりの光景だ。最後はボートから海に飛び込むという熱い見送りだ。これは沖縄の離島などでは定番だが、小笠原で体験できるとは思わなかった。

本当に素晴らしい体験をさせてもらった。小笠原に感謝だ。

■梅雨の内地に向かう

夜中はすごく揺れ、船底に波があたる大きな衝撃と音に何度も目が覚める。雨が降っている。揺れもひどい。その揺れによって、またすぐに寝つく。

6月27日朝、八丈島寄港。曇りなので往路で寄港した時よりも島をよく見ることができる。
港から滝が3つ見える。ここは屋久島のように水が豊富な証拠だ。

料金は戻らないが、帰路は八丈島でそのまま下船できるという。ただ八丈島から内地に戻るにはまた別に費用が必要になる。

八丈島、そして隣の青ヶ島も大変興味をそそる島なので下船も考えたが、別の機会にすることにする。

昔、エジプト観光の後にギリシャに寄ったことがあったが、エジプトの印象濃いままにギリシャに行ったのでギリシャがかすんでしまうという苦い経験をしたことを思い出したからだ。

小笠原のついでに立ち寄ったのでは八丈島に申し訳ない。これらの島の訪問は別に機会をもとうと思う。

さわやかな夏の小笠原から、梅雨の真ただ中の神奈川に戻る。
とても充実した6日間だった。

■費用の振り返り

費用の総額は夫婦二人で約21万円、詳細は以下に記す。

<交通費> 125214円

おがさわら丸 東京竹芝～父島 25130円×2人×2=100520円

ははしま丸 父島～母島 4290円×2人×2=17160円

レンタバイク 125ccバイク 72時間、保険300円、ガソリン334円 計7534円

<宿泊> 41688円

プルメリアヴィレッジ

1泊2食付き 8100円×2人×1泊=16200円

1泊朝食付き 6372円×2人×2泊=25488円

<ガイド付きツアー> 20000円

母島半日島内観光 5000円×2=10000円

南島上陸、兄島海域遊覧半日ボートツアー5000円×2=10000円

<食事> 全て二人分約16730円

1日目 昼：コンビニで購入約1000円、夕：船内レストラン2490円

2日目 朝：船内レストラン1480円、昼：生協で購入約1200円、夕：(宿)

3日目 朝：(宿)、昼：生協で購入約850円、夕：生協で購入約2650円

4日目 朝：(宿)、昼：弁当屋 hitoshi で購入約1500円、夕：佐藤商店で購入約1000円

5日目 朝：(宿)、昼：弁当屋 hitoshi で購入約1500円、夕：弁当 hitoshi で購入約1500円

6日目 朝：船内レストラン1200円、昼：自動販売機360円

<その他>

土産（パッションフルーツ、レモン、レモンジャム、塩キャンディ）約 3500 円

ギョサン 848 円

その他ビール、飲み物等約 1500 円